

論文の和文要旨

論文題目	接 触 と 領 有 —アルゼンチンの近代化過程における言説の政治— Cultural Contact and Appropriation —Politics of Discourse in the Modernization of Argentina—
氏 名	林 みどり HAYASHI Midori

独立後のラテンアメリカでは、支配的なクリオージョ知識人が自分たちに固有な文化的諸形態を構築することをつうじて、国民主義的同一性を支える文化的自己表象を構成しようとしていた。この文化的な自己表象の核にすえられたのが、土着的なものをめぐる表象である。従来、こうした土着文化は、いわゆる近代化や西欧化に対立するものとして論じられ、国民主義的同一性の古層と同定されてきたが、本論文はこうした土着文化の自明性を疑問に付すところから出発している。国民主義的同一性の核と想定された土着文化は、独立後の政治的、社会経済的な近代化の過程において、むしろ事後的に構成されたのであって、あらかじめ存在する文化的諸実体を反映したものではない。つまり、西洋植民地主義の自民族中心的な異国趣味と、西洋に対抗しながら、同時に西洋から承認されたいと願う非西洋の欲望が共犯関係を取り結ぶトポスにおいて、土着文化は表象されたのだ。いいかえれば、急速な勢いで支配を拡大しようとしていたヨーロッパがおしつけてくるカテゴリーと、そのカテゴリーを自己領有 appropriate し内面化することで対抗的な自己同一性を確立しようとするラテンアメリカのクリオージョ知識人の作業が、地理的にも歴史的にも固有と形容される土着文化をめぐる言説を構成していったのである。

独立期にあっては、土着的なものの表象は、旧宗主国スペインという圧倒的な力をもつ外部の他者を想定したうえで、それに対抗するものとしての〈わたしたちの土着的なもの〉という同一性として構成されたが、その後も同様の言説構造が維持された。圧倒的な力をもつ外部として想定されるものは、〈スペイン人〉、〈近代ヨーロッパ〉、〈近代的なるもの〉と異なっても、そうした外部との対抗的な関係のなかで、〈わたしたちの土着文化〉が構成されるという構造は変化しなかった。土着的なものを肯定するためにはつねに圧倒的な他者を必要とするというコロニアルな構造のなかで、アルゼンチンの土着性が構成されたということである。また、このような構造の内部では、対抗的に構成された土着の正統性を主張すればするほど、その自己同一性に存在理由を与えてしまっているスペインやヨーロッパの力が圧倒的で絶対的であることを再確認してしまうことにもなるのである。

以上の点を論じるにあたって、本稿ではまず、クリオージョ知識人たちが、一方では独立戦争によって接触することが可能となった内陸民の口承文化を自己領有し、その表現形態を

自分たちが想定する国民主義的な文化を代表するものとして再配置するとともに、同時代のヨーロッパ人旅行者の記録を読み、ヨーロッパとは異なる特殊ラテンアメリカ的なものの表象を旅行記から自己領有して、国民的な土着文化の自己表象を構成した点に着目する。ラテンアメリカのなかでもとりわけイギリス帝国の植民地主義的な活動が盛んな地域のひとつであったアルゼンチンを対象に、西洋世界に構築されたラテンアメリカについての知の体系と、クリオージョ知識人たちが企図した国民主義的言説の体系の相互依存関係のなかで、土着文化をめぐる言説や、それにまつわるさまざまな他者表象がどのように構成されていったかを明らかにしている。

また、このような土着文化とはあいにく、しばしば対立するものとして示されてきた都市下層民の表象の分析もおこなっている。19世紀後半、都市空間と都市住民の身体や道徳の管理や監視を徹底しようとする過程のなかで、まず都市下層民の風俗習慣や文化的なものが〈発明〉され、やがてそのネガティブな表象の多くの部分が移民文化として再配置されていき、ポジティブな土着文化の逆像として表象され、さらにはヨーロッパ植民地主義に抵抗するアルゼンチンの国民的主体を脅かす文化空間として認識しなおされていった過程を、衛生学や精神病理学、犯罪学等のテキストの表象分析をつうじて明らかにしている。

この都市下層民の言説に関しては、もうひとつ重要と思われる論点を提示している。19世紀末のアルゼンチンでは、移民をコントロールする技術の学としての犯罪学が格段に発展した。社会的にマージナルなひとびとを囲いこみ矯正することをめざした犯罪学は、ヨーロッパでも生まれたばかりの若い学問であった。アルゼンチンの科学者たちはその新しい学問を自分たちの学問領域に導入したのみならず、西洋の学問的な超克をめざし、ヨーロッパとは異なる独自の学問体系を構築しようとした。注目されなければならないのは、西洋を追い越して学問的リーダーシップを握ろうとしたことによって、アルゼンチンでは、当時、世界的に稀な、きわめて抑圧的な学問的暴力の装置が構築されたことだ。西洋で生まれたばかりの学問を自己領有し、批判の鏡とし、それを乗り越えたいとする願望もまた、西洋から承認されたいという欲望のひとつの変種であるが、その欲望が社会に何をもたらすことになったかという点が論者の関心である。

ところで、本稿ではまた、このように国民的同一性のよりどころとして構成された土着文化の言説（およびその逆像としての都市文化の言説）の批判的検討と同時に並行的に、支配／被支配の二元論に回収されてしまうような批判の構造そのものを脱構築する批判の可能性を模索している。ともするとコロニアル批評は、支配的な言説に対する批判を強めるあまり、逆に支配的言説の堅固な一体性を強調することになり、結果的に支配／被支配の二元論を強化してしまうきらいがある。だがそうした硬直した二元論そのものが、国民主義の源泉として仮構された土着文化言説を支えてきた点は見逃すわけにはいかない。こうした考えのもとに、支配的言説への批判をおこなう一方で、その内部の揺らぎやずれといったものに着目することで支配的言説の誇示する力の脱構築をおこない、また社会周縁部を固定化することをつうじて自己の権威を確かなものにしようとする支配的言説の力にあらがう記述の分析をおこなっている。

この点に関しては、主としてヨーロッパ人旅行者の旅行記録の読解を中心に分析をすすめた。植民地主義的な目的のためにラプラタを訪れた旅行者からの呼びかけに呼応するかたちで表出し、テキストのなかに書きとめられているラプラタの民の声や身振りを読みとろうとする企てである。しかしながらそういった声や身振りは、かならずしも植民地主義的言説に準ずるのでも、明らかに對抗的態度をとるといってもなく、むしろ植民地主義的言説にか

らまりあいながら、それに異議申し立てをしたり、あるいはまた支配的言説を中断したり宙吊りにする。そこには、支配層の叙述のなかに書きとめられ、支配層のエクリチュールの規範の内部に表象されようとしているにもかかわらず、植民地主義的言説からなかば自律的な機能を有する民衆の声や身振りが書きこまれてしまうことになるのである。そういった〈声〉は、いわゆるカウンター・ディスコースの成立を意味するものではない。というのも、それはあくまで植民地主義的言説の内部にその〈はじまり〉を有しているからである。したがって、それは植民地主義的言説の逆像として呈示されるのでもなければ、植民地主義的言説との相補関係に最終的には還元されてしまうことになる二項対立的な構図の片方の項として表出されるのでもなく、あくまで代補の運動としてとらえられるものである。この分析についての方法論的手法は、エドワード・サイード Edward W. Said が『文化と帝国主義』 *Culture and Imperialism* のなかで提示している「対位法的パースペクティヴ」 *contrapuntal perspective* を援用した。

以上のいくつかの論点を明らかにするにあたっては、メアリー・ルイズ・プラット Mary Louise Pratt が『帝国の眼差し』 *Imperial Eyes* のなかで提示した「接触領域」 *contact zone* という概念装置を用いている。プラットはこれを「本質的に相違する複数の文化が、しばしばきわめてアシンメトリカルな支配-被支配の関係のなかで出会い、衝突し、たがいを掴みあう社会空間」と定義し、この「接触領域」でつくりだされるインターカルチュラルな表象やテキストの分析をおこなっている。本論文では、この概念を拡大し、〈クリオージョ知識人-地方民〉、〈クリオージョ知識人-イギリス人旅行者〉、〈イギリス人旅行者-地方民〉、〈クリオージョ知識人-都市民〉、〈アルゼンチン科学者-西洋科学〉といったいくつかの接触の領域における言説の政治の分析が試みられているのである。